

嶼しまからの手紙

神野麻郎

要かなめさん、お変わりございませんか？

同窓会でお会いしてから、早いものでもう二年半になりますね。年賀状にありましたが、この春はれて会社を定年退職されたとのこと、おめでとうございます。ほんとうに長い間、お疲れ様でした。この激動の数十年、都会での会社勤めもさまざまなご苦労がありましたことでしょう。

こちら笹島の漁師には定年というものはなく、マツちゃんもフウたんもヨウちゃんも、みなまだ漁に出ています。ただ、みなもうどこかしら身体を悪くして昔の勢いはなく、とくにフウたんは屋根から落ちて腰をケガして以来、その痛みで半分も漁に出られていないようです。マツちゃんは長く町会の役員をやってくれていましたが、この春町会長に選ばれ、自分の漁よりもそちらの仕事の方が忙しいとこぼしています。ヨウちゃんも連絡船の有限会社の社長さんだけど、赤字続きなのでいつも悩ましい顔をしています。私も含めて、みな人生最後のがんばりどころというところ。退職したらだいぶ暇になるでしょうから、要さんもそのうちまた島に帰ってきてゆつくりしていらっしゃい。

さて、今日手紙を書こうと思ったのは、一つお知らせしたいことがあったからです。要さん、前の同窓会の際に、あのナツちゃん、龍山奈津子さんのことをなつかしそうにしゃべっておられたでしょう。そのことが頭に残っていたので、最近ナツちゃんにゆかりの人に会ったことをお知らせしようかと思ったわけです。電話でもメールでもよかったのですが、それでは要さんに私の受け取った感じが十分には伝えられないと思い、今どき古風にペンをとりました。もと文学少女で、今もエッセイを書いたり短歌をよんだりしている島のバアさんの遊びの一つだと思つて気楽に読んでくださいね。文章だと、敬語なんか使っちゃつとすました感じになるけど、笑わんといてね。

ゆかりの人というのは、ナツちゃんの弟の英二さんです。ほら、二学年下に、エイちゃん、エイちゃんとナツちゃんがかわいがっていた、サッカーの上手なかわいい男の子がいたでしょう。憶えてない？

旅館なんかを長年やってると、たまにあつと思う人に出会います。一週間ほど

前、六十代くらいの見覚えのない方が一人で泊まりに見えたんです。痩せて長髪で、もの静かな感じでした。そのようすや恰好からは釣りでも工事関係でもなさそうで、「観光ですか？」と訊くと、「ええ、まあ」とあいまいな返事です。花束を持っておられたので、島に縁故のある人でお墓参りにでも来られたのかと思いました。二時の便で着くと、日のあるうちは島の中をあっちこっちぶらぶらしているようでした。

でも夕方、座敷で食事をしていただいた時、浴衣に着替えたその方が、「笹島もずいぶん変わりましたね。あたりまえだな。五十年以上も前だもんな」と言われるのです。私は、

「昔、笹島にいらっしやったことがあるんですか？」と訊ねました。もと学校の先生だった人かもしれないと思いました。

「ええ。半年間くらい、住んでたんですよ。その間、小学校にも通いました。今の校舎とはちがうようですが」

「そうなんですか、島の小学校に。いつごろ……」
昭和何年ごろ……とだんだんに話していくと、

「お婆さん、ぼくの姉と同じくらいの学年のようですが、姉のこと、龍山奈津子というんですが、憶えておられますか？　ぼく、龍山英二と言って奈津子の弟です」とその人が言ったので、私はただもうびっくりしました。予約の電話で名前を「龍山」とは聞いてたけど、すぐには英二さんにもナツちゃんにもつながらなかった。ナツちゃんは昔も今もナツちゃんで、苗字で呼んだことなんかなかったもんなね。

「まあ、そう、英二さん？　エイちゃんね！　……ナツちゃんのこと、ええええもちろんはつきり憶えてますよ。忘れるはずない」

動悸が打つほどびっくりしましたが、まあまあ話は食事の後でゆっくり、ということになりました。台所の片づけや明日の用意などをあらかじめから、ビールとつまみを盆に載せて、二階に上がって行きました。お客さんはほかに釣りの常連さん二人だけだったので、時間はありました。それにあのなつかしいエイちゃんだもんなね。部屋に入るとスケッチブックや絵の具が見えたので、「絵を描かれるんですか？」と訊ねると、「ええ、まあ」と。お酌をしてあげながら二人で話しはじめると、英二さんもだいぶうちとけた感じになって、長い話になりました。

私たち同級生の誰もが今でもよく憶えているよね、ナツちゃんのこと。そういうえばあの事故の後しばらくしてから、監督だったお父さんがどこかに転勤になって、英二さんもいなくなったのでした。

英二さんは、あれ以来ずっと島には立ち寄りなかつた、五十数年ぶりです、今日初めて島に来てみたんです、今までも島に行つて姉を供養したい気持ちはいつもあったのだけど、辛すぎて、近くまで来てもどうしても足を向けられなかつた、というのです。でもずいぶん長い年月が経つてもう父親もいなくなり、自分もいつどうなるかわからない齡になつてきたので思いきつて来てみた、さつき堤防付近を歩いて、うろおぼえだつたけど事故の現場はすぐにわかつた、姉にいつぱい詫びを言つてきました、じつは明日が姉の命日なんです、というのです。涙なしには聞けない話で、私は半タオルがぐしょぐしょになりました。明日が命日と聞いてハツとして、ああ、たしかに亡くなつたのはこんなコスモスの花が咲くころだつたと思ひ出しました。

それからはしぜんとナツちゃんの思ひ出話になりました。

「ナツちゃんはいいい子だつたねえ。あの転校してきた四月の入学式の日から、もうクラスのみなの注目の的になつたんですよ。だつて、クラスといつても十六人しかおらず、みなよく知りあつた幼なじみばかりでしょ。その中に色の白い、都会風な、賢いようなあの子が入つてきたんよ。言葉もきれいでしょ。女の子たちはたちまちあこがれたし、男の子たちは、恥ずかしがりだから口では言わんけど、みなナツちゃんを好きになつたはずよ」

「ええ、色白の、笑顔のよい姉でした。ぼくらが笹島の学校に転校してくるについでには、父もだいぶ悩んだらしいんです。ウチは母が病気で早く亡くなつてしまつて、父と子供たちとの三人家族でした。笹島の現場に転勤が決まつた時、父だけ単身赴任してぼくらは親戚の家に預けるといふ話もあつたようですが、それも忍びないというので、父は思ひ切つてぼくらを笹島に連れてきたようです。来てみると、家は工事現場や飯場に近くてうるさいでしょ、不便だし友だちもいないし、ぼくは嫌だつたけど、姉は島のきれいな景色やゆつくりした生活が気に入つてすぐに溶け込んだようでした。前向きな明るい性格でしたから。というよりも、無理にも自分が家の中を明るくしなければ、という気持ちで姉にはずつと強かつたんだと思います。楽しそうにふるまふ姉を見ながら、ぼくもだんだん島での生活に慣れました」

わつ、こんなふうに詳しく書きつらねていくと、長い手紙になつちやいそう、つて思うけど、要さんにその時のエイちゃんの言葉やふんいきを伝えたいと思つてね。これでも私の今年一番の力作なんだから、がまんして読みなさいよ。

「ナツちゃんは勉強もよくできたねえ。じつはね、ナツちゃんが来るまでは要という子が成績はいつも一番でずつと級長してたの。それでも中学校に入った四月の最初のテストでナツちゃんが一番だつた。たしか、オール百点だつた。要さ

ん、そうとう悔しかったみたいでそれから猛勉強し出してね。「カッチャンはこのごろ夜中もローソクつけて勉強しとるらしいぞ」とみなの評判になったくらい。ほら、あのころはまだ島は自家発電で、夜は十時で電気が消えたから、その後は灯りといえばローソクしかなかったでしょ。結局要さんはその後もよく勉強して、同級生では珍しく大学まで行って、大きな会社に入りました」

「そうですね。母親がいないので姉は早くから家事を引き受けてくれて、家では忙しかつたんですよ。この島では食事は飯場のおばちゃんたちが作ってくれたんで助かったんですが。姉は暇があったら机に向かっていたのを憶えています。でも勉強するというよりも、本を読むのが好きでしたね。父がたくさん買い与えていました。絵を描くのも好きで、将来は絵本を作る人になりたいなんて言っていました」

「そうそう、ナツちゃんの絵、今でも憶えてるのがありますよ。なんというのか、すごく自由で楽しい絵。私ら島の子の描く絵はどこか地味で重たいのに、絵ってこんなに楽しいものなんだよ、ってナツちゃんの絵が言ってるみたいだった。本はね、あたしもお話の本が大好きだったから、よくナツちゃんと本の話をしたんですよ。それで仲好しになれた。本のことで新しいことをいっぱい教えてもらった気がする。いっしょによく学校の図書室に行ったんですよ」

そのうち当時の島の暮らしの話になって、あのころは水に困っていた、本島でも簡易水道と井戸水でなんとかまかなったけど簡易水道はちよろちよろとしか出ずにね、と私が言うと、工事の人たちの宿所のあった前島では深いボーリングをしたけど潮気のまじった水しか出ないので、それは生活用水にして、飲料水は船で運び入れていたようだ、などの話は初めて聞きました。要さんはどうか知らないけど、私は堤防の上を歩いて吊り橋を渡って前島のナツちゃんの家にも二三次遊びに行ったことがあるのよ。工事の間、島の人が許可なく前島に渡るのはいちおう禁止になってたけど、ナツちゃんとしめしあわせてこっそりね。人夫さんたちのプレハブ小屋が立ち並んでいる所からちよつと離れて、やっぱり簡素な感じのナツちゃんの家がありました。部屋も狭かったけど、壁に子供たちの絵がいっぱい貼ってあった。家の中に小さなエイちゃんもいたような気がする。遊び場所といつて、あたりは野茨だらけの荒れた野原と石浜しかなくて、ナツちゃんたちがちよつとかわいそうな気がしたことを憶えています。

ハツパの話も出ました。憶えていますか？、ウーウ、ウーウとサイレンが鳴ると、大人も子供も、「あ、ハツパじゃ」と言って家の中やもの陰に隠れたのでしたね。数分後、ダイナマイトの爆発音がある。まもなく空からばらばらと小石が降ってくる。潮水に濡れた小石が、乾いた音をたてて家の瓦屋根に当たって、

カランコロンとはじけた。屋根瓦が割れることもあった。工事現場の港からはいちばん遠い山際の学校にも飛んできて、授業中窓ガラスが割れて誰かがケガしたこともありました。

でも子供心には、ハツパはなんとなくわくわくもしたよね。物陰に隠れ、いさましく豪快な爆発音を今か今かと緊張して待つのだったし、降ってくる石を避けるのは、戦争ごっこのおもしろさにも似てたし。英二さんにとってもハツパは初めての経験で、ちよっとおもしろかった、そんな話もしたんですよ。

話し込んで時がたつうちに、私は英二さんに、同級生にも来てもらいましようか、英二さんの学年の子たちにも声をかけてみましようか、狭い島だから何人かはすぐ来てくれますよ、と訊いてみたんです。ナツちゃんや英二さんをなつかしがる同級生は何人もいるだろうし、私だけが英二さんの話を聞くのももったいない気がしてきたからです。でも英二さんはやわらかく断りました。ひっそり、姉に会っていききたいというのです。そしてこうして、姉の親しい友だちだった私に話を聞いてもらえればそれで十分、というのです。私はその気持ちもよくわかる気がしました。

「さっき、ぼく、笹島には長い間足を向けられなかったと言ったでしょう。もつと言えば、ぼくは長い間笹島を憎んでいたんです」

多少はお酒のせいだったでしょうか、そう英二さんが言いだしました。「笹島で港の工事がなければ、あの防波堤がなければ、防波堤があっても柵が作ってあれば、姉の命が奪われることはなかった、笹島を離れてからずっとそんなふうに思えて、理不尽だと思うでしょうが、笹島が憎かったのです。姉の命を奪った、嫌な禍々しい島だと思ったのです。」

一方で自分のふがいなさも責めました。一瞬のことだったんですが、どうしてあの時、「姉ちゃん、危ないッ」て叫んで姉を止められなかったのか。姉はよく登校途中に本を読みながら堤防の上を歩いてただけで、「危ないから姉ちゃん止める！」ってどうしてもっと強く言わなかったのか。ぼくは大人に近づくにつれ、よけいにそのことが悔しく、姉の死は自分の責任のような気がしました。そんなどうしようもない気持ちには、父親に訴えればかえって父親を責めてしまいそうで、一人悶々と苦しんだ時期がありました。父もあの日からぼく以上に自責の念や後悔に苦しみながらずっと耐えて暮らしてたんです。妻を亡くした上に娘まで守ってやれず、以来父という人はもう、ほんとうに心の底から笑うようなこととはなくなりました」

やさしい仲のいい姉ちゃんを亡くしてエイちゃんはかわいそう、私なんかはそんなふう思ったただけだったけど、ご家族にはご家族の言うに言えない悲しみ苦

しみがあつたんだと私は思い知らされました。

「姉の死をなんとか受け入れられたのは何年もたってからです。世界には病気や事故や飢えや戦争で死ぬ赤ちゃんや子供らがたくさんいますね。姉の事故もその一つだったんだと。不運で不幸なできことだったんだと。そして、短かい一生だったけど、姉も生きている間は姉らしく、好きな本を読んで、絵を描いて、友だちと遊んで、笑って泣いて、せいっぱい生きたんだと。悲しい姉でなく、そういう姉を思おうとしました。

ぼくはしばらく外国を放浪した後、美術の学校に入ったんですが、それも姉の影響が大きかったと思います。就職し、結婚して、子供もできました。そんな節目のたびに姉を思い出して、ああ、姉もあのときさえなければ、こんな人としてのふつうのことができたはずなのに、喜びや楽しみをいっぱい味わえたのに、と思いました。でもまた、姉は母といっしょに、いつも身近でぼくらを見守ってくれたようにも思えます。やつとそう思えるようになりました。ふしぎですね、そういう姉は、あの姿のまま齢をとってるんです」

話の途中で常連さんや来客への応対で席をはずしたけど、前後合わせてその晩英二さんから聞いたのはこんなことでした。

翌朝早く、堤防の方に行く英二さんに、私はお花を持ってついて行きました。あの堤防の下の場所は、長い間、近くに行くたびいやでもナツちゃんを思い出していたのですが、でも長い年月の間にはその痛ましい記憶もいつしか薄れました。なにもないコンクリートの上に、昨日英二さんが供えたお花がありました。丈高い、いまだに柵もない堤防は昔に変わりましたが、風雨や波の飛沫に黒ずんでもうだいたいぶ傷んではいるようです。お花を供え、「ナツちゃん、エイちゃんに来てくれたよ。よかったねえ」と呼びかけて手を合わせる涙が出ました。ひざまづいて祈っている英二さんを残して私は引き返しました。二人だけで過ごしたいでしょう。

その日、英二さんはまた島を歩いてみるといつて絵を描く道具を持って出かけました。橋を渡って前島にも行ったようです。帰ってからも部屋で絵を描いておられました。

夜はまたナツちゃんの話をしました。ナツちゃんのお墓は、実家のある町にあるそうです。建設会社で全国をあちこち飛び回って仕事をされたお父さんは、定年退職すると家族みなで暮らして子供たちが育った自宅に帰って、妻と娘の眠るお墓を守りながら一人で暮らしたそうです。ご自身は長寿を保たれて、数年前に亡くなられたそうです。「長い年月が過ぎたからか、姉はぼくらにきれいなものだけを残してくれた気がします」という英二さんの言葉が胸に残りました。私た

ちにとつても、ナツちゃんという子はそういう子だったよね。

翌朝は七時の便で帰るといので、波止に送っていこうとしたら、玄関で英二さんから一枚の絵をプレゼントされました。山の見晴らし台から笹島の集落や港や前島を眺めた水彩画です。素人目にもよく描かれていて、なにか笹島の見ただけではない深い表情が写されています。こんな貴重なものをいだけない、もったいないと断ったんですが、いや、笹島に置いてほしいと思って描きました、迷惑でなければぜひこの旅館のどこかに掛けておいてもらえませんか、というのです。

港には先にエツちゃんたち三人が見送りに来ていました。英二さんが来たことを誰にも知らせないで送り出したと後でわかったら、私がいろいろ文句言われるからと前の晩に英二さんをちよつと脅して、同級生仲間の一部に知らせることは許してもらったのです。島に残っている同級生の女子たちはみな来てくれました。もちろん女子といっても、みんなもう孫もあるおバアさんたちだけですね。出航前のほんの短い時間でしたが、それぞれが英二さんと言葉を交わしつつ、ナツちゃんを偲びました。

ご家族で食べてくださいと英二さんには海産物の手土産を少し持たせました。私からというより笹島からのプレゼントです。少し寂しそうな笑顔で手を振って、英二さんは島を離れていきました。その英二さんのそばにはナツちゃんもいて、やっぱりあの人なつつこい笑顔で手を振ってくれているような気がしました。

英二さんの絵はその日のうちに額に入れて玄関に掛けさせてもらいました。やって来る人はたいいてい目を留めて褒めていきます。後でネットで調べてみると、英二さんは名のある洋画家で芸術大学の先生もなさっていることがわかりました。絵のことはわからないけど、それは温かい、なつかしい感じのする絵です。そしてつくづく眺めていると、絵の中のどこかにナツちゃん、エイちゃん、そして昔の私たちもいていっしょに遊んでいるようなふしぎな感じがしてくるので。要さんにも、今度帰ってきたら見せてあげるね。

要さんはナツちゃんが好きだったでしょう？ 恥ずかしがらなくてもいいよ、男子はみなそうだったんだから。憶えていますか？ 事故の後しばらく、私たちのクラスはみなでよく泣いたね。授業中誰かがナツちゃんのことを思い出してすすり泣きをしだすと、すぐ伝染して、男子もふくめてみなが泣いたよね。教室中がワンワン鳴るほどのこともあった。先生も止められなかった。何度かそんなことがあった。

あれから長い長い年月が過ぎて昔のことはもうすべて夢のようだけど、せめてこの手紙でまた、ナツちゃんを偲んであげてくださいね。